

星はらはらと

第一回

太田 治子



——二葉亭四迷の明治——

昨年の夏、私は初めてロシアを旅した。もつとも敬愛する明治の小説家二葉亭四迷が、晩年のおよそ九ヵ月間をペテルブルグ（現・サンクトペテルブルグ）で過ごしていた。明治四十一年（一九〇八）年七月に、当時四十代半ばの二葉亭は朝日新聞ロシア特派員として念願のペテルブルグの地を踏んだ。ツルゲーネフの『あひびき』を翻訳して以来、およそ二十年の月日が流れていた。日露戦争が終結して三年後のロシアは、二葉亭の目にどのような印象を与えたのだろうか。第一次革命の発端といわれる血の日

曜日事件から三年がたち、ペテルブルグには不気味な静けさが漂っていたようである。ロシア革命が成立するのは、それから八年後のことになる。年が明けて明治四十二年（一九〇九）年の二月初めから、二葉亭のからだの具合が急に悪くなった。白夜の夏以来ずっと続いてきた不眠症が改善して、元気になってきた矢先だった。医者の診断は、肺結核である。高熱が続きついにベッドから起き上がれなくなり、やむなく帰国を決めた。その年の五月十日、二葉亭四迷は日本郵船の賀

茂丸で帰国途中、ベンガル湾沖で息を引き取った。享年四十五歳だった。

私は、二葉亭四迷の小説が好きでならなかった。処女作の『浮雲』は、その第一篇が明治二十年に出版された。日本で初めての言文一致体の小説とされている。何やらしかつめらしく気おくれするところがあり、実際に読んだのはほんの五年前のことである。しかしざ読みだすと、そうしたことは一切忘れてしまった。とにかく読んでいて面白かった。主人公内海文三うちみかみぶんぞうの不器用な生き方が、現代の悩めるフリーターのそれと重なって感じられた。「立身出世」という明治の風潮を地で行く語学に秀でたエリート官吏であったのに、上司にゴマをすることができなくてリストラされてしまう。下宿先の叔父の家の雰囲気は、一変する。叔父の娘のお勢は文三のかつての同僚の、調子のよい本田になびき、その母親のお政からは露骨な嫌味をいわれる。それでも文三は、叔父の家をでるふんぎりがつかない。従妹のお勢に、惹かれていた。翻訳のアルバイトをしながら、針のムシロのようなその家の二階の部屋にいる。お勢は、軽薄な本田に遊ばれている気配がした。文三は一人二階の階段を昇っていく。

二十三歳の二葉亭四迷がその第一篇を発表した時、同じ年頃の正岡子規は、これはすばらしい小説だと感激した。それまでの日本には、こうやって一人の青年の心理を掘り下げる小説はなかったのに違いない。十九世紀末のロシア文学の影響を受けていることは、明らかだった。それと共に、この小説の根底には明治新政府への批判の眼が光っていると思うのである。薩長連合の新政府は、エリートの官吏の養成をあせっていた。そこから、薩長以外の幕府方の子供たちはつまみはじきだされる傾向があった。二葉亭は明治十四年、十七歳の春に東京外国語学校露語科に入学した。この時既に、彼がまっとうな「立身出世」の道を歩まないであろうことが予期される。明治七年の東京外国語学校の生徒便覧によると、フランス語には薩摩出身者が六名、ドイツ語には長州出身者が十三名いる。しかし魯語（ロシア語）には、薩長出身者が一人もいない。ロシアは二流国であるという認識が、明治六年のこの学校設立の折りより定着していた。二葉亭の父は、尾州藩の御鷹場吟味役として江戸詰めを命じられていた下級武士であった。元治元（一八六四）年、江戸市ヶ谷合羽坂の尾州藩上屋敷で後の二葉亭四迷——本名長谷川辰之助は生まれていた。維新前夜の緊張の走る

おたか・はるこ●1947年生まれ。近著に『石の花 林芙美子の真実』『時こそ今は』（ともに筑摩書房）、『明るい方へ 父・太宰治と母・太田静子』『夢さめみれば 日本近代洋画の父・浅井忠』（ともに朝日新聞出版）など。